



自分史



人生の別れ道

平栗恒雄

自分史 人生の別れ道

私は八十四歳。これまで兵役を含めて五つの職業につき、現在、毎日が日曜日の生活を送っている。息子と娘は共に大学を卒業し、独立してそれぞれの人生をあゆんでいる。

サラリーマンの生活で特に出世したとか金持ちになったわけでもないが、私にしてはできすぎた社会生活を過ごしてきたと思う。

しかし、この姿が幼い頃からの目標であったわけではない。これまでにはいくつかの人生の別れ道があった。それをそのときどきの成り行きや判断によって歩んできた結果が、現在の姿になったのである。

もし、この別れ道を別の方向にすすんでいたらと、近頃、いろいろと思いふけるときがある。わたしの人生の結末が見えてきた現在、これまでを振り返り、大きな転機となった四つの別れ道に立ってみよう。

一 進学か就職か(韓国の仁川)

昭和十六年、私が十六歳で旧制中学二年のとき、兄二人が相次いで兵役に就いた。父は病身で無職、稼ぎ手がいなくなったので、両親、私と弟妹四人の生計はピンチとなった。それまでも、姉が細々と仕送りしてくれていたが、それからは姉の負担が「ズシリ」と重くなることとなった。姉は私の中学卒業を願って学費を負担するとまで言ってくれた。有り難かった。・・・しかし、迷った。

姉の負担が増すことと、果してそれがいつまで続けられるのかという危惧があった。私は悩みに悩んだ末、中学を中退して働くことが最善の策であると思い、それを実行した。

学歴尊重社会という面からみると、これが取り返しのつかない失敗だったことを、後年、つくづくと思い知らされた。しかし反面、この失敗を取り戻そうという勉学意欲が、それからの人生の大きな支えとなったといえよう。

二 蒸気機関車（SL）の機関士か、少年飛行兵か

私は三年間の勉学と飛行技術を習得できる後者に賭けた。

中学校を二年で中退すると朝鮮鉄道局の機関区に就職した。初めての仕事は機関車の掃除と油差しであった。そこは封建的な職場で、内地(本土)からきた不良たちに古参顔(づら)されて、毎日のように殴られたり脅されたりする日々だった。

しかし、SLの構造を実地と勉強で覚えてくると、物理的な機能に魅せられ親しみと愛着を感じるようになり、古参の暴力も苦にならなくなった。

その後、乗務員を目指して努力した結果、就職三年目の昭和十九年三月に機関士となった。弱冠、十八歳で異例の昇進だった。両親と姉の喜びはひとしおであった。

しかし、このスピード昇進も高学歴の人にとっては珍しいことではなかった。私は大学卒業者が僅か六ヶ月の研修で機関士になったのをみた。やはり学歴。

どうしても学歴を得ようと思った私は、近づく徴兵検査を意識して軍隊の諸学校に入ることを考えた。そして私は大空に羽ばたく夢と勉学を満たすため、陸軍航空学校の生徒となった。だが終戦によってこの夢はあえなく消え去ってしまった。

三 SL関係の仕事につくべきか、学歴が得られる仕事につくべきか

勿論、私は後者を選んだ。終戦によって夢と希望に破れた私は、身の振り方に思い悩んだ末、国鉄の鉄道教習所の生徒（国鉄職員）となった。生徒は寮に入って三年間、一般教養とトンネル建設技術に関する勉強をすることになる。給料を貰って勉強ができ、卒業すれば念願の旧制中学卒業の資格が得られるという願ってもない条件であった。

しかし、念願を果たした私を待っていたのは、当時、社会的大問題になった「占領軍総司令官」の指令による国鉄の大幅な機構改革であった。このとぼっちりで私の新任地は建設部門ではなく管理部門となってしまった。

四 大学の資格を得て建設系の公務員に

昭和二十四年三月教習所を卒業し、中学卒の資格を得たが、望まぬ部署に配属されてやる意欲も失いがちになっていた。

しかし、このような時だからこそ、と意欲を奮い立たせて、新制大学の夜間部に通うことにした。夜間部を提灯学校といって軽蔑する人もいたが、持論である私の勉強法である授業・復習・予習するということからみて、私は夜間部に通ったことを正解と信じている。このことは、後の就職試験・昇進試験で証明された。

そして約一年、国鉄での将来に不安を抱いた私は、父の知人の助言で競輪選手を志すこととなった。仕事と学業の合間をぬっての猛練習。一年後、努力が実りプロの中級クラスと戦えるまでになった。

だがある日、練習中に落車して重傷を負う羽目となった。私は悩んだ末、選手志望を断念することにした。その後、国鉄にも見切りをつけ、大学を卒業するとその資格で第一の人生といわれる公務員となったのである。

以上が私のたどった主な人生の別れ道であるが、現在に至る道を歩んだ理由の一つは、私が最初の失敗を取り返そうとして、一貫して勉学を志ざしたことにあると

思う。その意気込みを自分は壮とするも、その良否は神にしかわからない。しかし、私は現在の姿が最も幸福だったと信ずることにしている。

平成二十三年一月五日